

42584

教科書文庫

4

815

51-1919

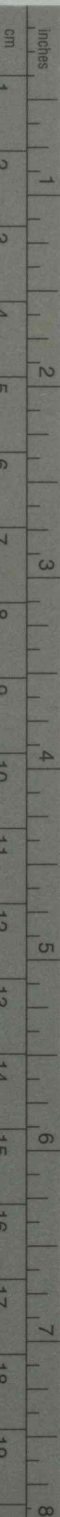
20000
48924

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



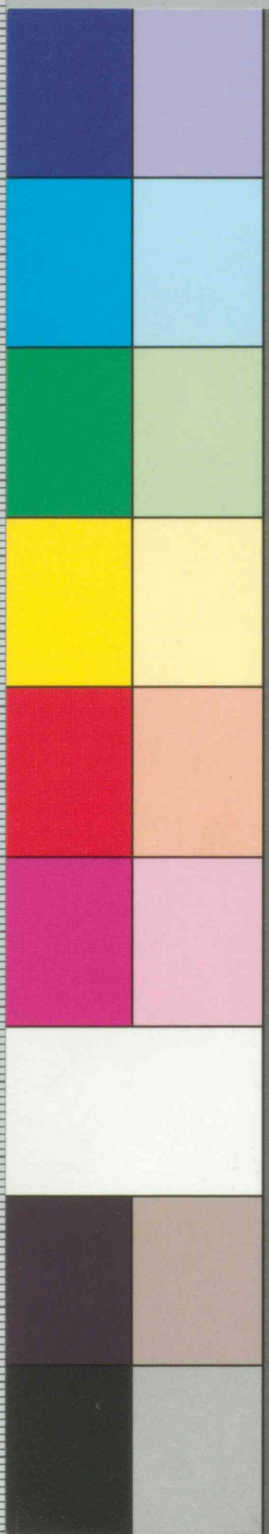
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
H019
資料室

大正日本文法

修正版

上卷



資料室

375.9
H019

日十二月一十年八正大

濟定檢省部文

用科教科語國校學中·校學範師

保科孝一著

大正日本文法 上卷

東京 會社育英書院發兌



大正日本文法 修正版 上卷

目次

第一編 總說

第一章	主語と述語	一
練習	二
第二章	主語の成分	三
練習	六
第三章	述語の成分	七
練習	九
第四章	文の接續	一〇

目次

第二編 品詞

第一章 名詞

練習……………一

練習……………一五

第二章 代名詞

一人代名詞……………一七

二 指示代名詞……………一九

練習……………二二

第三章 動詞

一 正格活用の動詞……………二四

練習……………三三

第六章

接續詞……………四四

第五章

副詞……………五〇

練習……………五二

第四章

形容詞……………四四

一 久活用の形容詞……………四六

二 志久活用の形容詞……………四七

練習……………四九

二 變格活用の動詞……………三五

練習……………五〇

三 形容動詞……………五一

練習……………五三

練習	………	五
第七章 感動詞	………	五
練習	………	五
第八章 助動詞	………	六
練習	………	六
第九章 助詞	………	九
練習	………	九
第十章 品詞の種類	………	九
練習	………	九

大正日本文法 修正版上巻

文學士 保科孝一 著

第一編 總說

第一章 主語と述語

雨降る。水流る。風吹く。山あり。川あり。人走
 る。犬眠る。雪晴る。脊高し。顔の色白し。
 【一】右の文例はいづれも或る思想を言ひあらはして居る
 が、かやうに一のまとまつた思想を言ひあらはすには、先づ

主語
述語
文

第一に言ひあらはすべき目的物、第二に其の目的物について言ひあらはされる動作・存在又は性質等が必要である。即ち雨・水・風・山・川・人・犬・雪・脊・顔の色は、其の目的物、降る・流る・吹く・あり・走る・眠る・晴る・高し・白しは其の目的物の動作・存在又は性質等を言ひあらはしたものである。

右のやうに或る目的物を言ひあらはすものを主語といひ、動作・存在又は性質等を言ひあらはすものを述語といふ。又主語と述語の結び付いたものを文といふ。

練習

一 左の例により主語と述語とを説明せよ。

(1) 梅の花散りしく。

(2) 煙立ちのぼる。

(3) 雨の音やむ。

(4) 遊客少し。

(5) 中禪寺湖あり。

(6) 木枯の風物凄し。

(7) 友人來る。

(8) 獅子が居る。

二 國語讀本から主語と述語の結び付いた文例を集めよ。

第二章 主語の成分

名詞

風吹き來れり。精神も快活なり。夜も更けぬ。天氣變らむ。心持同じからず。

【三】右の風・精神・夜・天氣・心持はいづれも文の主語で、或る物事を言ひあらはして居る。かやうに物事を言ひあらはすものを名詞といふ。

汝一人のみ。われも人なり。彼も人なり。かしこは一寒村なり。

代名詞

【三】右の汝・われ・彼・かしこはいづれも文の主語で、或る物事の名稱の代りに用ゐられて居る。かやうに物事の名稱の代りに用ゐられるものを代名詞といふ。

體言

【四】名詞及び代名詞を體言といふ。

暖き風吹く。怪しき雲あらはれ出づ。悲しき日近づきぬ。なつかしき彼は來らざりき。

形容詞

【五】右の暖き・風・怪しき・雲・悲しき・日・なつかしき・彼はいづれも文の主語である。その中風・雲・日は名詞、彼は代名詞で、暖き・怪しき・悲しき・なつかしきは名詞や代名詞に結びついてその性質等を言ひあらはして居る。かやうに名詞や代名詞に結びついてその性質等を言ひあらはすものを形容詞といふ。

練習

一 左の文例について、名詞・代名詞及び形容詞を指示せよ。

(1) 或る人其の奉侍する君主の逆鱗に觸れ、汝の罪死に當る。覺悟せよ、
といふ嚴命を蒙つた。彼顔を地を擦附けて、どうぞ命だけ御助け下
さるやうと嘆願に及んだ。「それは相成らぬ。併し死に方は汝の選
擇に委す。如何なる方法で死にたきか即答せよ」

(2) 疎き板敷の中央に爐を切りたり。

(3) 脚下に薄黒き雲の波一面にはびこる。

(4) 崖の上に赤き腳踏咲き亂る。

(5) 翠濃き丘陵の際に巨剎の屋根見ゆ。

二 國語讀本から文の主語たる名詞・代名詞及び之に附屬する形容詞を集めよ。

第三章 述語の成分

雨やむ。通信の機關備はる。人々あわてふためく。
花散る。竹林あり。

動詞

〔六〕 右のやむ備はるあわてふためく散るありはいづれも
文の述語で、動作又は存在を言ひあらはして居る。かやう
に動作又は存在を言ひあらはすものを動詞といふ。

夜の風寒し。叫び聲喧し。疾篤し。月色麗し。

形容詞

〔七〕 右の寒し喧し篤し麗しはいづれも文の述語で、物事の
性質等を言ひあらはして居るものであるから、形容詞であ

る。

幹旋頗るつとむ。風はげしく吹く。疾甚だ篤し。
彼の責任一層重し。

副詞

〔八〕右の頗るはげしく甚だ一層は動詞や形容詞を修飾して居る。かやうに動詞や形容詞を修飾するものを副詞といふ。

支那軍艦一隻來航したり。終日讀書せり。昔男ありけり。我も行かむ。日なほ高かりき。正成は忠臣なり。雪なほやまず。

助動詞

〔九〕右のたりせりけりむきなりずは名詞・動詞及びその他の語に附屬していろくの意味をあらはして居る。かやうに名詞・動詞及び其の他の語に附屬していろくの意味をあらはすものを助動詞といふ。

用言

〔十〕動詞・形容詞及び助動詞を用言といふ。

練習

左の文例により動詞・形容詞・副詞及び助動詞を指示せよ。

- (1) 探海燈はいなづまか、水雷はげに雷か。
- (2) 中佐の姿はやもなし。
- (3) 御書面確に拜見仕候。

- (4) 堅田・唐崎かすかに見ゆ。
- (2) 百草皆枯る。
- (6) 高經また來り攻む。
- (7) 高橋東岡は三十二歳なりき。
- (8) 官軍今にも乗込まむ。
- (9) 種々むづかしき議論もあらむ。
- (10) その状恰も人間に似たり。

第四章 文の接續

品行方正にして且つ勤勉なり。學説は頗る穩健なり、然れども清新の氣に乏し。英佛および露はかく決心せり。大佐又は少將一名。

接續詞

〔十二〕 右の且つ然れどもおよび又はは語句を接續して居る。かやうに語句を接續するものを接續詞といふ。

性質善良なれども、學力足らず。昨日博覽會を見物せしが、有益なるもの多かりき。來月の中旬に上京する筈。花は櫻木人は武士

〔十三〕 右のどもをがのにはは語句を接續し、又はその關係をあらはして居る。かやうに語句を接續し、又はその關係をあらはすものを助詞といふ。

助詞

練習

一 接續詞を含む文例を作れ。

二 左の文例中の助詞を指摘せよ。

(1) あけゆく空に響き渡る銅羅の音一黨いづれも溢るゝばかりの笑顔に駈集り、人数を改め、姓名を呼び上げし後、かねての退口、整々として裏門より立出づれば、旭日東天に昇りて、満目の雪紅に匂ひぬ。

(2) 彼は美しけれども、多少修飾あるを如何せん。此の花の美彼に劣れども、謂ひしらぬ温情と野趣とを有す。

(3) 木材の用途は實に廣大なり。器財道具の小なるより、家屋宮殿の大なるに至るまで、一として之を用ゐざるはなし。

第二編 品詞

第一章 名詞

いつしか木々もうち枯れて、寂しき庭の山茶花や、北風寒き藪蔭に、びはの花咲く年の暮。

【十三】 右の木々・庭・山茶花・北風・藪蔭・びはの花・年の暮は物事
の名稱であるから、いづれも名詞である。

石山寺の秋の月、雲をさまりて影清し。
春よりさきに咲く花は、比良の高嶺の暮の雪。

固有名詞

普通名詞

名詞の複数

〔十四〕 右の文例中石山寺は或る一つのきまつた寺の名稱、比良は或る一つのきまつた山の名稱であるから、これを固有名詞といふ。人の名や土地の名は、すべて固有名詞である。秋の月・雲影・春花・高嶺・暮の雪はひろく通じて用ゐられるものであるから、これを普通名詞といふ。

〔十五〕 名詞を複数にするには、山々・川々・國々・寺々・人々のごとく、同語を繰返すこともあり、子ら・乙女ら・生徒たち・士官たちのごとく、「ら」たちを結びつけることもある。

口語においても名詞の用例は別に變らない。たゞ人物をあらはす名詞を複数にする場合に、「がた」「ども」「たち」「ら」を結びつけることがある。

奥様がたはまだ御出になりません。

車夫どもの言葉が實にきたない。

生徒たちはまことに元氣です。

子供らはもう寝ました。

練習

一左の文例から固有名詞と普通名詞を摘出せよ。

(1) 彦根去り草津來り煙は早くも瀬田川に横たはりて京都も近くなりぬ。

朝日將軍の遺跡何れのところぞ問へど答へず。霞にたゞまる遠近の

山影或は淡く或は濃く鴉の浦風波に眠りて粟津の松原ひとり昔を語

り顔なり。

(2) ビスマルクはドイツの片田舎なる貴族の家にはうまれたりしが、その家

庭は頗る嚴格にして、彼はいとけなき頃より決して他の貴族の子弟のごとき悠長なる生活を許されざりき。六歳に達せし時、母は彼を國都ベルリンに送りて、某博士の家塾に入學せしめたり。その家塾はスバルタ流の教育を重んじ、體操の外に游泳の課目もありて、過激なるまでに體育を行へり。

二 複數名詞を有する文例を作れ。

第二章 代名詞

汝よく此の書を學ば、遂に王者の師たらむ。十餘年の後、我また汝を見るべし。
畝傍山の東南に檜原神宮あり。こゝに詣づるもの

誰かは其のかみを思ひ出で、皇室の御威徳を仰がざらむ。

代名詞

〔十六〕 右の汝、我、此のこゝ、誰、其のは物事の名稱の代りに用ゐられるもので、いづれも代名詞である。代名詞に人物の名稱の代りに用ゐられるものと、事物・場所・方角を指示してその名稱の代りに用ゐられるものとある。

一 人代名詞

われすでに老いたり。
これひとへに汝の力による。
僕もまた君の例にならはん。

人代名詞

彼も人なり、我も人なり。
誰に向はむ。
〔十七〕 右のわれ汝僕君彼誰は人物の名稱の代りに用ゐられるもので、これを人代名詞といふ

人代名詞の複數

〔十八〕 人代名詞を複數にするには、われら汝らかれら某らのごとく、「ら」を結びつけることもある。

口語では人代名詞の複數をあらはすのに、「われ／＼」の如く同語を繰返すこともあり、又左の如く、「がた／＼ども」たち「ら」を結びつけることもある。

私どももさう考へます。

君たちはどう致しませう。

僕らは駄目だらう。

二 指示代名詞

代名詞

これよりも寧ろかれを選ばむ。
この人もかの人も米國の移住民なり。
この麓を過ぐるに、山の靈水の流の面白さに思はずもこゝに詣づ。

夜はそこに念佛してあかしたり。
いづれかわが住家ぞと立ち惑ふ。
たま／＼こゝかしこに残る家に、人住めり。
いづこに宿らんあてもなし。

指示代名詞

事物

場所

方角

いづち行きけむ影だに見えず。

〔十九〕 右のこれかれこのかのこゝそこいづれこゝかしこいづこいづちは事物・方角・場所を指示して、その名稱の代りに用ゐられるもので、これを指示代名詞といふ。

〔二十〕 指示代名詞の中これそれあれかれいづれなには事物、こゝそこかしこいづこいづこは場所、こなたそなたあななかなないづかないづちは方角を指示すものである。このかのあのそのは「こ」「か」「あ」「そ」に助詞の「の」が結びついたものである。又これそれの「こ」「そ」はこはそはのごとく獨立にも用ゐられる。

口語の指示代名詞中こつちそつちあつちどつちよりはこちらそちらあちらどちらの方が丁寧である。又こちらそちらあちらどちらは人代名詞に用ゐられる。これに「さま」のかたを結びつけることもある。

練習

一左の文例から人代名詞と指示代名詞を摘出せよ。

こゝに一人の茶道坊主嘗てその士の恩を受けたることありしが、今この有様をいたみ夜潜かに焼飯を携へゆきて興へたり。かの士、汝が只今の振舞あらはれなば、われよりも罪重からん。われ飯を食ひたりとて命助かるべきにあらざればとくかへれ。」と云ふ。

二左の文例中事物・場所・方角を指示す代名詞を指示せよ。

(1) 岸の此方にて眺むる人あり、かなたの坂を登りゆく人あり。

- (2) いづれの方面にも登山口あり。
- (3) この人にしてそのものにあらず。
- (4) 百姓家があちらにもこちらにも散らばつてゐる。
- (5) いづくをさして行くあてもなし。
- (6) こゝを出づれば木盡き草稀なり。
- (7) そこに警告として一枚の紙がある。
- (8) いづこからともなく集つて来た。
- (9) こちらに私と友人と立つてゐた。
- (10) 竹村がくれ夕餉たく煙を靡くこゝかして。

三複數の人代名詞を含みたる文例を作れ。

第三章 動詞

動詞

花咲く。

書を読む。

鳥が空を飛ぶ。

子三人あり

彼の力與つて多きに居る。

【三十二】 右の咲く・読む・飛ぶ・あり・居るは動作又は存在をあらはすもので、いづれも動詞である。その中咲く・読む・飛ぶは動作、あり・居るは存在をあらはす。

われもともに行かむ。

昨日も相撲見物に行きたり。

花見に行く。

急ぎで行けば間に合ふべし。

〔二十二〕 右の文例における行くといふ動詞は、用ゐる方によつて語形が**行カ・行キ・行ク・行ケ**と變化する。すべて動詞は用ゐる方によつて語形が變化するが、かゝる語形の變化を動詞の活用といふ。動詞の活用にはいろいろの種類がある。

一 正格活用の動詞 正格活用は五つに別。

停車場にて君を待たむ。すでに三日待ちたり。
手紙を待つ。他に待つものなし。
しばし待てばよき便あり。こゝに待て。

動詞の活用

四段活用
動詞の活用は五十音圖中あり、
四段に活用する物も少い

〔二十三〕 右の動詞待つは**待タ・待チ・待ツ・待テ**と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを四段活用といふ。

注意 右の語形變化に就ては後に説明する。その他の語形變化に就てもその通。

四段活用の動詞は五十音圖中**カ・サ・タ・ハ・マ・ラ**の六行に存在し、次ぎのやうに活用する。

買	打	貸	咲
ハ	タ	サ	カ
ヒ	チ	シ	キ
フ	ツ	ス	ク
フ	ツ	ス	ク
ヘ	テ	セ	ケ
ヘ	テ	セ	ケ

住	マ
借	ラ
	ミ
	ム
	ム
	メ
	メ

四段活用の動詞は口語においても同様に語形が變化する。

月を見む。 花を見て懷を述べ。

古文書を見る。 子を見ること親に若かず。

花をし見れば物思もなし。 寫真を見よ。

上一段活用

【二十四】 右の動詞見るは見・見見ル・見ル・見レ・見と語形が變化する。 かやうに語形の變化するものを上一段活用といふ。

上一段活用の動詞は五十音圖中ア・カ・ナ・ハ・マ・ワの六行に存

在し、次ぎのやうに活用する。

射	イ	イル	イレ	イ
着	キ	キル	キレ	キ
煮	ニ	ニル	ニレ	ニ
干	ヒ	ヒル	ヒレ	ヒ
見	ミ	ミル	ミレ	ミ
用	キ	キル	キル	キ

注意 『用』を波行上二段に活用させてもよす。

上一段活用の動詞は口語においても同様に語形が變化する。 又飽く借る・足るは四段活用に屬する動詞であるが、口語ではこれを上一段活用に用ゐる地方が少くなす。

下二段活用

鞠を蹴む。 鞠を蹴て遊ぶ。 鞠を蹴る。
かしこに鞠を蹴る大宮人あり。 ながく鞠を蹴れば足疲る。 運動のため鞠を蹴よ。

〔二十五〕 右の動詞蹴るは蹴蹴蹴ル蹴ル蹴レ蹴と語形が變化する。 かやうに語形の變化するものを下二段活用といふ。

下二段活用の動詞は「蹴」のみである。

「蹴」
ケ
ケ
ケル
ケル
ケレ
ケ

下二段活用の動詞は口語においても同様に語形が變化する。 又蹴は口語において概ね四段活用に用ゐられる。

上二段活用

明朝はやく起きむ。 朝早く起きて散歩せり。
毎日午前五時に起く。 朝早く起くる人は幸あり。
午前五時に起くれば間に合ふ。 朝六時に起きよ。

〔二十六〕 右の動詞起くは起キ起キ起ク起クル起クレ起キと語形が變化する。 かやうに語形の變化するものを上二段活用といふ。

上二段活用の動詞は五十音圖中カタハマヤラの六行に存在し、次ぎのやうに活用する。

盡	キ
落	チ
キ	ケ
ク	ケル
クル	ケレ
クレ	キ
チ	ケ

強	恨	老	懲
ヒ	ミ	イ	リ
ヒ	ミ	イ	リ
フ	ム	ユ	ル
フル	ムル	ユル	ルル
フレ	ムレ	ユレ	ルレ
ヒ	ミ	イ	リ

注意 『恨』は四段活用に用ゐても差支ない

上二段活用の動詞は口語に於いてまづたく上一段活用に變化して居る。

來春試験を受けむ。之を受けて見よ。

はげしく質問を受く。訪問を受くる日一定せり。

賞を受くれば満足すべし。今年はず試験を受

けよ。

【二十七】 右の動詞受くは受け受け受け受け受け受け受け受け

下二段活用

と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを下二段活用といふ。

下二段活用の動詞は五十音圖中ア行からワ行に至るすべてに存在し、次ぎのやうに活用する。

得	掛	寄	捨	重	與	責
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム
ウル	クル	スル	ツル	ヌル	フル	ムル
ウレ	クレ	スレ	ツレ	ヌレ	フレ	ムレ
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ

植	荒	消
エ	レ	エ
エ	レ	エ
ウ	ル	ユ
ウル	ルル	ユル
ウレ	ルレ	ユレ
エ	レ	エ

下二段活用の動詞は、口語においてまづたく下一段活用に變化して居る。

正格活用

【二十八】以上に列挙した四段活用・上一段活用・下一段活用・上二段活用および下二段活用の五種を正格活用といふ。口語では正格活用が四段活用・上一段活用および下一段活用の三種である。

練習

一左の文例の中から正格活用に屬する動詞を摘出し、その活用を説明せよ。

- (1) 用意の小笛は音牙えて、曉の空に響き渡りぬ。いづれも我を忘れて、駈來る一黨、前後左右より立寄りて首筋を捉へ、その額を打守れども、老の皺のみ、それかと思ふ創痕もなし。さらに引出して小袖を脱がすれば、あら嬉しや紛ふ方なき先君が無念の御大刀筋、消えもやらず二年越し、ありくと残りぬ。大願成就今更胸に通りにて言葉も出でず。せき來る涙に兩眼を曇らせ、中には嬉しさの餘り大地に打伏し聲を擧げ、雪中に號哭するものあり。
- (2) 降りたる雪の少きにや朝餉終りて草鞋の緒結びし時は、日のさす處は大方消えて、木の蔭、山の裾、谷の底に其の名残を留めしのみなり。
- (3) 懐かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の

疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出です。彼の家は我が友の家なりけり、此の家には我に優しき老人ありきなど昔の事を想ひ出で、坐ろに哀を催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

二 口語に於ける上一段活用及び下一段活用の活用表を作れ。

三 左の動詞はいかに活用するか。

- 似る 舞ふ 點頭く 傾く 促す 揉む 朽つ 明く 潜む 枯ら
- す 聞食す 鑄る 恥づ 糺す 費やす 召す 率ゐる 育つ 商
- ふ 閉づ 誘ふ 生ふ 延ぶ 綻ぶ 罵る 認む 出づ 給ふ 堪
- ふ 移るふ 聳ゆ 報ゆ 諫む 譽む 馴る 嘲る 絞る

二 變格活用の動詞

又來む春を待て。 横濱へ來て一泊す。

海賊追ひ來。 又來る時もあるむ。

この秋に來れば好都合なり。 明朝六時に來よ。

【二十九】 右の動詞來は來・來・來・來・來・來と語形が變化する。 かやうに語形の變化するものを加行變格活用といふ。 加行變格活用の動詞は「來」のみである。

「來」
コ
キ
ク
クル
クレ
コ

加行變格活用の動詞は口語ではコキクルクルクレコと語形が變化する。

用 加行變格活

食事をせず。出世をして親を喜ばす。
 兄と旅行をす。旅行をする好機会なし。
 たえず手習をすれば、上手になる。
 熱心に勉強をせよ。

用 佐行變格活

【三十】 右の動詞爲は爲^スシススルスレセと語形が變化するかやうに語形の變化するものを佐行變格活用といふ。

爲
セ
シ
ス
スル
スレ
セ

佐行變格活用の動詞は、口語に於てシシスルスルスレセと語形が變化する。

國語の名詞又は漢語を動詞として用ゐる場合には、すべて佐行變格に活用する例であるが、口語ではその慣用が左の如く甚だ區々である。

勉強	察案	議	解
シセ	ジシ	サ	セ
シ	ジシ	シ	セ
スル	ジル	ス	セル
スル	ジレ	ス	セル
スレ	ジレ	セ	セレ
シセ	ジシ	セ	

注意 國語の名詞として取扱はれる甘ミ「疎ミ」重ミ「安ミ」等を動詞として用ゐるときに「甘ンジル」「疎ンジル」「輕ンジル」「重ンジル」「安ンジル」と佐行上一段に活用させる人が多い。

もろともに死なむ。 虎は死にても皮をのこす。
 毒を飲めば死ぬ。 人の死ぬる時、その言やよし。
 彼死ぬれば、血統絶ゆ。 われとともに死ぬ。

奈行變格活用

【三十二】 右の動詞死ぬは死ナ死ニ死ヌ死ヌル死ヌレ死ネと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを奈行變格活用といふ。

死
ナ
ニ
ヌ
ヌル
ヌレ
ネ

注意 「死ヌ」を四段活用の動詞として用ゐることは、現代文において許容される。

奈行變格活用の動詞は、口語において四段活用に變化して居る。

明朝告別式あらむ。やゝしばし對面ありて退出し給へり。兄弟三人あり。もし差支ある場合には通知すべし。差支あれば至急御一報を乞ふ。願

はくは君に幸あれ。

良行變格活用

【三十二】 右の動詞ありは在ラ在リ在リ在ル在レ在レと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを良行變格活用といふ。

在
ラ
リ
リ
ル
レ
レ

注意 良行變格活用の動詞「居り」を四段活用として用ゐることは、現代文において許容される。

良行變格活用の動詞は、口語において四段活用に變化して居る。

變格活用

【三十三】 以上に列舉した加行變格活用・佐行變格活用・奈行變格活用および良行變格活用の四種を變格活用といふ。

口語では變格活用が、加行變格活用と佐行變格活用の二種である。

練習

一左の文例の中から變格活用に屬する動詞を摘出して、その活用形を説明せよ。

- (1) 神の月日はこゝにも照れば、四季も來り、風雨雪霰かはるゝ到りて、興淺からず、蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ずしづかに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。
- (2) 余は改めてケンブリッチ在學中少しく金錢を浪費せしを謝し、ビラグルに乗船中深く注意すべきを誓ふ。
- (3) この夜余は他の二人を誘ひて、共に公の側に侍りき。

(4) 仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花より、山吹の花あり、李の花あり。

- (5) 恥を忍びて故郷に歸るは、後に死なんためなり。
- (6) 敵艦大破して全滅に歸したり。
- (7) 深く自重して活躍の氣を養ひ居り申候。
- (8) この事を父にておはせし人に語り申しけり。
- (9) ベンギンは海を隔てた北の方から泳いで渡つて來るのである。
- (10) 随分勉強をしたから首尾よく及第した。

二左の漢語を動詞として用ゐる場合には、いかに活用するか。

運動 旅行 達 發 決 關 評 命 焙 封 感 信 論 煎
 辯 辭 浴 譯 略 熟 祝

三 形容動詞

天氣清朗にして波靜なり。

理非きはめて明なり。

論旨まことに穩なり。

夏涼しくして冬暖なり。

將士皆慙然たり。

奔流滔々たり。

形容動詞

【三十四】

右の文例における靜なり・明なり・穩なり・暖なり・慙然なり・滔々なりは物事の性質又は状態を言ひあらはして居るもので、これを形容動詞といふ。形容動詞はやはり動

詞の一種で、良行變格活用の動詞と同じやうに活用する。

麗	確	滔々
ナラ	ナリ	タラ
ナリ	ナリ	タリ
ナル	ナレ	タル
ナレ	ナレ	タレ
ナレ	ナレ	タレ

形容動詞は口語において靜テ靜ダ穩テ穩ダあるひは僅テ僅テアル、明テ明テアルといふやうに用ゐられる。

練習

一 左の文例の中から形容動詞を摘出せよ。

- (1) 忽ちにして百千筋の金光きら／＼として八方に散じ天地全く明なり。
- (2) 水澄みて水なきが如く、水底地よりも鮮なり。

(3) 十戸にも足らぬ草の屋根が並んで、野仕事の間の午下りが朝の如く静である。

(4) 須磨・明石の長汀・曲浦に淡路島をあしらつた景色は、繪のやうに綺麗だ。

(5) 並居る志士慨然たり。

二 既習の讀本教材から形容動詞を集めよ。

第四章 形容詞

神澄み氣清し。

疾すこぶる篤し。

本年の寒さは昨年よりも嚴し。

高き波寄せ來る。

山里の冬の夜はことに寂しきものなり。

形容詞

【三十五】

右の清し、篤し、嚴し、高き、寂しきは物事の性質等を言ひあらはして居るもので、いづれも形容詞である。

病頗る重く見受けらる。

彼の任や頗る重しといふべし。

重き職に就く。

父の病重ければ、竊に心を痛めぬ。

【三十六】

右の文例における重しといふ形容詞は、用ゐる方によつて語形が重ク、重シ、重キ、重ケレと變化する。形容詞は用ゐる方によつてすべて語形が變化するが、かゝる語形の變

形容詞の活用

化を形容詞の活用といふ。形容詞の活用に二つの種類がある。

一 久活用の形容詞

遠くば車を憊はむ。空晴れ渡りて、鳥影遠くあらはる。日暮れて道遠し。遠き山々霞に隠れて見えなくなりぬ。麓まではなほ遠ければ、車を憊ひぬ。

〔三十七〕 右の形容詞遠しは遠ク・遠ク・遠シ・遠キ・遠ケレと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを久活用といふ。久活用の形容詞は左の如く活用する。

遠

低	深
	ク
	ク
	シ
	キ
	ケレ

久活用の形容詞は口語において

善く来た。人が善い。大層善い家だ。これで善ければ上げよう。

といふやうに、その語形が善ク・善イ・善イ・善ケレと變化する。

二 志久活用の形容詞

御顔麗しくば、いかに嬉しからむ。空麗しく晴れ渡れり。日高くさしのぼりていと麗し。麗しき御顔を拜し奉りぬ。心麗しければ、徳自ら備はる。

〔三十八〕 右の形容詞麗しは麗シク・麗シク・麗シ・麗シキ・麗シ

志久活用

ケレと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを志久活用といふ。志久活用の形容詞は左の如く活用する。

烈	嬉	悪
シク	シク	シク
シ	シ	シ
シキ	シキ	シキ
シケレ	シケレ	シケレ

志久活用の形容詞は口語において、

烈しく降つて來た。寒さが烈しい。烈しい寒さだ。寒

さが烈しければ豊年だ。

といふやうに、その語形が烈シク烈シイ烈シイ烈シケレと變化する。

【三十九】 以上の外形形容詞に明ケク明ケシ明ケキといふやうに活用する語が少しある。

練習

一左の文例の中から久活用や志久活用に屬する形容詞を摘出せよ。

- (1) 上下心を一にして、入るや虎穴の奥深く、この大任は船底に積める石より尙重し。
- (2) 月益、淡く、東いよく白し。
- (3) 命より名こそ惜しけれ、武士の道にかふべき道しななければ。
- (4) しづけき夏の夜半の空、遠き蛙の歌きけば、無聲にまざるさびなれや。
- (5) 天明より文化、文政まで、久しく文壇の牛耳を執りたる太田南畝翁の事蹟につきては、面白きこと頗る多し。
- (6) 心長閑けく候はんには、床しきことも候べけれ。
- (7) この幾月、恐ろしく寂しかつた街に、俄かに多くの人が入つて來たのだ。

から、子供達には疑もなく嬉しいことに違ひない。
(8) 學問の賞翫者が多くなつて、之を保護する様になつたならばその進歩には著しいものがあるであらう。

二 明ケシ・靜ケシ・サヤケシ等の語を含める文例を作れ

三口語の形容詞の活用表を作れ。

第五章 副詞

誠に慶賀の至りに堪へず。

久しく君を見ざりき。

必ず勝たむ。

疾大に篤し。

彼の地位甚だ輕し。

頗る重し。

副詞の一

【四十】 右の誠に久しく必ず大に甚だ頗るは動詞や形容詞を修飾するもので、いづれも副詞である。

更に一層その困難を感じたり。

頗る重く見受けらる。

少し靜かに行け。

非常に早く來れり。

副詞の二

【四十二】 右の更に頗る少し非常には他の副詞を修飾するもので、やはり副詞である。

副詞の三

畢竟天佑の致すところなり。

或はかゝる結果を見るに至るやも知るべからず。

惟ふに我が國體の精華は他に比類なし。

要するにこれ爭議の端を啓かむ。

【四十二】 右の畢竟或は惟ふに要するには語句を修飾するもので、これもやはり副詞である。

【四十三】 以上の如く副詞は動詞・形容詞および他の副詞を修飾し、又場合によつては語句をも修飾するものである。

練習

一 左の文例に於ける副詞はなにを修飾して居るか。

(1) 四賢は各、その性質傾向を異にしたれども、均しく予の畫策を最も良く採用しくれたる人々なり。

(2) 夜來の密雲いつしか全く晴れて、殘月淡く天空にあり。

(3) 蟻は孜孜汲々餌を漁りて寧日なし。其の奮闘努力實に勤勉の模範たり。

(4) 東郷大將は不動山の如く、いさゝかも驚ける氣色なく、從容として望遠鏡を手にせるまゝ、仔細に戰狀を觀望せり。

(5) 勿來の關にて花の散る様の餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、その儘に打過ぎなんも口惜しく、この口吟に任せて斯くなん仕りぬ。

(6) 其の間に何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘り甚しい喧

嘩はしない。

(7) 遠く喇叭の音が起つた。待構へた人々の氣が一時に引締る。軍馬も皆勇むのだらう。神尾將軍以下手綱を控へる。山梨參謀長の馬が頻りに尾を振る。

二國語讀本からいろくの副詞を集めよ。

三左の副詞を用ゐて文例を作れ。

豈に 蓋し 流石に 敢へて 況んや 恐らく ゆめく 須らく
げに いかゞか よしや 忽ち 悠然と ひたすら つらく 具
さに

第六章 接續詞

大和には名勝多し。されば遊覽の客常に絶えず。

日すでに暮れぬ。されど宿るべきところもなし。

左せんか將た右せんか、甚だ惑なき能はず。

歐洲各國を巡歴し、然る後米國へ赴く豫定なり。

然るに間もなく鳥の仲間も獸の仲間も疲れ果て、

和睦をなしぬ。而して蝙蝠を惡みて絶交なしけれ

ば、かくてこの時より蝙蝠は晝飛びまはるを得ずな

りぬ。

〔四十四〕 右のされば、されど、將た、然る、後、然るに、而して、かく

ては語句を接續するもので、いづれも接續詞である。

。口語においてはつぎの様な接續詞もしばく用ゐられる。

そのみならず けれども それだから それですから そして

接續詞

さうして さうすると そこで ところが ところで それでは
それなら それから

練習

一 左の接續詞を用ゐて短文を作れ。

しかのみならず 其の上 將又 けれども それですから

二 左の文例における接續詞の意味を説明せよ。

- (1) 春晴千里、山また山、水また水。
- (2) 後日聞くところによれば、ヘンスロー教授は余の送りし書を劔橋の哲學會にて朗讀し、之を印刷して會員に頒布し、又余の送りし化石は古生物學者の注意する所となれり。
- (3) 天下第一の用たるものは金錢なり。されども金錢の事のみ主張せば

士氣鄙劣となる。

- (4) 諸車通行止。但し空車は此の限にあらず。
- (5) 随分暑いね。それでも臺灣よりましだらう。
- (6) 父王の侍臣達が乗つて見ましたが、非常の悍馬で誰も之を乗りこなすことが出来ません。それで父王は之を返さうとしました。
- (7) 宮野といひ群雀といひ、何れ劣らぬ駿足。また殘雪は某聯隊長の副馬で、みな侮るべからざる強敵である。しかし金石も輕々しくひけを取るべき馬ではない。

第七章 感動詞

ああ、時なるかな、命なるかな。
あはれ、ことしの秋もいぬめり。

感動詞の一

あな、いさましの軍神。
はや、十六才になりぬ。
すは、大事なるぞ。
あら、おもしろや。

【四十五】 右のあ、あはれあなはやすはあらは感情を言ひあらはしたもので、これを感動詞といふ。
喜怒哀樂又は驚愕恐怖等の感情に刺激されて發する音聲は、すべて感動詞である。

感動詞の二

【四十六】 左の如く人の注意を促したり、人を呼び掛けたり、或は應答したりする時に用ゐる語も、感動詞として取扱ふ。

- 一、人を呼びかけたり、或は注意を促したりする時に用ゐるもの、
 やあ、く、者ども出合へく。
 やよ、待て、しばし。
 いか、に申候。
- 二、應答する時に用ゐるもの、
 いな、こは片腹痛し。
 おう、その事にて候。
 いや、さにあらず。

練習

左の文例の中から感動詞を摘出してこれを説明せよ。

- (1) いざ君も書き給へ。
- (2) 何ぞそれ最期の悲惨なるや。
- (3) あはれ此の家に老人もありつるなるべし。
- (4) あら嬉しや紛ふ方なき先君が無念の御太刀筋。
- (5) 嗚呼立志なるかな立志なるかな。
- (6) やをれ俊成思うても見よ。
- (7) あはれ彼は逝けり。
- (8) すは見給へとて古狸を投出したりけり。
- (9) まあお聞きなさい。先日大隅の方へ旅行しました。
- (10) いたはしや和尚は袈裟も衣もどろまぶれになられた。
- (11) これかごの衆もう底はぬけはすまいか。いさく／＼氣づかひはござりませぬ。

ませぬ。

- (12) おうさ此の船で臺灣まで同行を頼んだがさいてくれぬ。
- (13) いえ叔父様には知らせずに参りました。
- (14) さあお話しなさい和郎が歸つた譯を。いえ此處で聞きませう。
- (15) はい解りました。

第八章 助動詞

この家を繼ぐものは汝なり。

君君たり、臣臣たり。

聲の限り叫びけり。

明日午前八時に出頭すべし。

人の心は長閑からまし。
傍に人をなきごとし。

【四十七】 右のなり・たり・けり・べし・まじ・ごとしは名詞・代名詞・動詞・形容詞等に附屬して、いろくゝの意味を言ひあらはして居るもので、いづれも助動詞である。

賞品を與へられむ。

優等賞を授けられたり。

衆人の中にて辱しめらる。

或は捨てらるゝ時もあるむ。

主辱しめらるれば臣死す。

助動詞

助動詞の活用

助動詞の種類

【四十八】 右の文例におけるらるといふ助動詞は、用ゐる方によつてラレ・ラレ・ラル・ラル、ラルレと語形が變化する。助動詞は用ゐる方によつて大抵語形が變化するが、かゝる語形の變化を助動詞の活用といふ。助動詞の活用には動詞や形容詞の活用に似たものと、少し違つたものとある。

【四十九】 助動詞には左のごとき種類のものがある。

受身の助動詞 可能の助動詞

使役の助動詞 指定の助動詞

推量の助動詞 願望の助動詞

時の助動詞 敬語の助動詞

打消の助動詞

詠歎の助動詞

比況の助動詞

口語の助動詞においては詠歎比況の二種が消滅した。

犬太郎にうたる。

昨夜盜賊に衣類數十點を盗まる。

遭難者全部を救護せしめらる。

恩を仇にて報いらる。

【五十】 右のる・らるは動詞及び助動詞に結びつき、或るものが他のものから動作を受ける意味をあらはすもので、これを受身の助動詞といふ。

受身の助動詞

受身の助動詞は左の如く下二段活用の動詞と同じやうに活用する。

る	レ	ル	ル、	ルレ	レ
らる	ラレ	ラル	ラル、	ラルレ	ラレ

なほ湯水のみは飲まる。

午後四時までには必ず開かるべし。

來年は試験を受けらるゝ筈。

晩の六時までには書き終へられむ。

【五十一】 右のる・らるは動詞に結びつき能力をあらはすのに用ゐられるもので、これを可能の助動詞といふ。

可能の助動詞

可能の助動詞は左の如く下二段活用の動詞と同じ様に活用する。

る	レ	ル	ル、ルレ
らる	ラレ	ラル	ラル、ラルレ

口語における受身及び可能の助動詞は「れる」「られる」の二種で下一段活用の動詞と同じやうに活用する。

金を取られる。

何も彼も任せられる。

私も讀まれる。

明日なら屹度來られる。

母子を眠らす。

騎兵、馬を走らす。

猫に鼠を捕へさす。

使役の助動詞

【五十二】 右の「さす」「しむ」は動詞に結びつき、或るものが或るものに動作を行はせる意味をあらはすもので、これを使役の助動詞といふ。

使役の助動詞は左の如く下二段活用の動詞と同じやうに活用する。

す	セ	セ	ス	スル	スレ	セ
さす	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセ
しむ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメ

口語における使役の助動詞は「せる」「させる」の二種で、下一段活用の動詞と同じやうに活用する。又「しむ」はすでに口語において消滅した。

繪を書かせる。

試験を受けさせる。

助動詞の活用

親の恩は百行の本なり。
父子ともに南朝の忠臣たり。
君君たり、臣臣たり。
三日までに必ず到着せしむべし。
男子としてはかくあるべき筈なり。

【五十三】 右のなりは體言及び用言に、たりは體言に、べしは動詞及び助動詞に結びつき、確實に或は確實なるものとして、或る意味を言ひあらはす場合に用ゐられるもので、これを指定の助動詞といふ。但しべしは右の外推定・決意及び命令等の意味をあらはす場合にも用ゐられる。指定の助動詞なり・たりは左の如く良行變格活用の動詞と同じやうに、べしは形容詞と同じやうに活用する。

なり	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	ナレ
たり	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	タレ
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	

「ベシ」と良行變格活用の動詞「アリ」と結び付いて、「行クベカラ

指定の助動詞

「ズ」行クベ、カリ、シニ」といふやうに用ゐられることがある。

口語における指定の助動詞は「だ」であるの二種である。

明日は日曜日だ。

楠木正成は忠臣である。

だ	だ	だ	だ	だ
だ	だ	だ	だ	だ
だ	だ	だ	だ	だ
だ	だ	だ	だ	だ

詞 推量の助動

詞 推量の助動

「五十四」 右のらむありましらしは動詞や助動詞に結びついて推量の意味をあらはすもので、これを推量の助動詞と

いふ。

推量の助動詞は左の如く活用する。但し「らし」は活用しな

らむ	らム	らム	ラメ
めり	メリ	メル	メレ
まし	マシ	マシ	マシカ

口語における推量の助動詞は「らし」「だらう」の二種で、その中「らし」は形容詞と同じやうに活用するが「だらう」は活用しない。

今日は何も用はないらしい。

あの人も来るだらう。

言ひたきことも少からず。
誰も皆あの様にありたし。
試験を受けさせたし。

【五十五】 右のたしは動詞及び助動詞に結びついて、願望の意をあらはすもので、これを願望の助動詞といふ。

願望の助動詞は左の如く形容詞と同じやうに活用する。

たし	タク	タク	タシ	タキ	タケレ
----	----	----	----	----	-----

「タシ」と良行變格活用の「アリ」と結び付いて「行キタカラム」行キタカルベシ」といふやうに用ゐられることがある。

口語における願望の助動詞も、右と同じ「たい」である。
水が飲みたい。

願望の助動詞

早く行つて見たい。

年ごろ思ひつること果し侍りぬ。

櫻かざして今日も暮しつ。

空うらゝかに晴れたり。

實は山伏にてはおはせざりけり。

かゝるためしも數々ありき。

彼は數年前學校を卒業せり。

風吹かば波立たむ。

【五十六】 右のぬつたりけりきむは動詞や助動詞に、せりは名詞に結びついて、時の觀念をあらはすもので、これを時の

時の助動詞

助動詞といふ。

右の中ぬ・つ・たり・けり・き・せりは過去の時、むは未来の時をあらはす。

時の助動詞は左の如く活用する。

來未	去			過		
	む	き	けり	たり	せり	つ
			ケラ	タラ	セラ	テ
			ケリ	タリ	セリ	テ
ム	キ	ケリ	タリ	セリ	ツ	ヌ
ム	シ	ケル	タル	セル	ツル	ヌル
メ	シカ	ケレ	タレ	セレ	ツレ	ヌレ

口語における時の助動詞として、過去の意をあらはす場合に「た」「未來の意をあらはす場合に「う」「よう」が用ゐられる。過去の助動詞が「た」一つであることは、口語における時の助動詞の著しい特色である。

花がすつかり散つた。

僕も一所に行かう。

今年は試験を受けよう。

首かき切り捨ててけり。

参議百川謀をめぐらして定め申してき。

雲を霞と失せにけり。

通ひし人のあとも絶えにき。

高札をあまた立てたりき。

漆を湯に沸して浴びたりけり。

いづれの御時にかありけむ。

【五十七】 右の文例におけるてけりてきにけりにきたりきたりけりは過去の助動詞を二つ重ねて一層強く過去の意味を言ひあらはすもの、けむは過去の想像を言ひあらはすものである。

注意 過去の助動詞を二つ重ねたものは、便宜上複合助動詞と見る。

【五十八】 四段活用の動詞を

書けり 指せり 打てり 言へり 讀めり 取れり
のごとく用ゐて、過去の意味をあらはすことがある。この

語形は良行變格活用の動詞と同じやうに活用する。

注意 四段活用以外の動詞を「綻べり」「受けり」「あれり」といふやうに用ゐるのは誤である。但し「異り」「居り」を「異れり」「居れり」と用ゐることは現代文において許容される。

完了の時

【五十九】 過去、現在、未來の時の外、左の如く動作の完了をあらはすものがある。これを完了の時といふ。

行きたり 現在完了
行きたりき 過去完了
行きたらむ 未來完了

現在の時

水、流、る。

鳥、飛、ぶ。

風、烈、しく、吹、く。

花に寄せて懐を述べしむ。

新井白石は有名なる外交家なり。

【六十】 右の流る、飛ぶ、吹く及びしむなりのごとく、動詞や助

動詞は右の語形で現在の時をあらはす。

物事の名は名詞なり。

出る杖はうたる。

空氣の密度は高さに反比例す。

恒久時

歴史的現在

【六十一】 右のやうな科學上の原則定理或は格言等に用ゐられる動詞及び助動詞は、時に關係なく言ひあらはされる。之を恒久時といふ。又歴史上の出來事はつねに現在に書きあらはす。これを歴史的現在といふ。

琵琶をよく弾かせ給へり。

御馬より落ちさせ給ひぬ。

おほやけも行幸せしめ給ふ。

先生は來月横濱に着かる筈。

御笛たびて吹かせられけり。

【六十二】 右のす、さす、しむ、る、らるは動詞や助動詞に結びつ

いて敬意をあらはすもので、これを敬語の助動詞といふ。右の中ずさずしむは使役の助動詞るらるは可能の助動詞から轉じたものである。

敬語の助動詞の活用は、使役や可能の助動詞に準じて知ることが出来る。

口語における敬語の助動詞には使役から轉じたせる「させる」「しめる」がま
つたく用ゐられない。但し口語においては、敬意を表示するのに三つの
方法がある。その一は、

十日頃横濱に着かれる。局長はいつも早く來られる。

のごとく、可能の助動詞から轉じた「れる」「られる」を動詞に結びつけるもの

その二は、

その邊を少し散歩なさつては何うです。

先生はいつも朝五時にお起きなさいませ。

ちよつと御待ちください。

のごとく、名詞や動詞になさる「くださる」等をつなげるもの、その三は、

今月の末にお着になります。

鎌倉へ御出になる筈だ。

のごとく「お着になる」「お出になる」といふやうな形式を用ゐるのである。

第三の形式がなか／＼ひろく用ゐられる。

御恩の萬分の一も報い奉らず。こはかなはじと刀投げすて、逃げ失せたり。

打消の助動詞

よもやさることもあるまじと思ひぬ。
【六十三】 右の「まじ」は動詞や助動詞に結びついて、打消す意味をあらはすもので、これを打消の助動詞といふ。打消の助動詞は左の如く活用する。但し「じ」は活用しない。

まじ	マジク	マジク	マジ	マジキ	マジケレ
ず	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ

「ズ」と良行變格活用の「アリ」と結び付いて「行カザラム」「行カザリキ」「行カザルベシ」「行カザルモ」「行カザレバ」といふやうに用ゐられることがある。

口語における打消の助動詞は「ん」「ない」「さい」の三種である。
雨が降らん。

友人が來ない。
別に變つたこともあるまい。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

谷の鶯春を告ぐなり。

秋風に初雁がねぞ聞ゆなる。

【六十四】 右の「なり」は動詞に結びついて、詠歎の意をあらはすもので、これを詠歎の助動詞といふ。

詠歎の助動詞は左の如く活用する。

なり	ナリ	ナル	ナレ
----	----	----	----

注意 「盛衰定めなきはこの世なりけり」の「けりもなり」と同じく詠歎の意をあらはす。

詠歎の助動詞

比況の助動詞

坦々たる平野に軽車を行るごとし。
漕ぎゆく舟の跡なきごとし。
歲月流るゝごとし。

【六十五】 右のごとしは用言に結びついて比喩の意をあらはすもので、これを比況の助動詞といふ。
比況の助動詞は左の如く形容詞と同じやうに活用する。

ごとし	ゴトク	ゴトク	ゴトシ	ゴトキ
-----	-----	-----	-----	-----

口語助動詞の活用も形式の上から、大體三種に分れる。即ちその一は動詞と同じやうに活用するもの、その二は形容詞と同じやうに活用するもの、その三は動詞とも形容詞とも異なる活用を有するものとである。その

一に屬する活用は左の通。

受身	可	能	使役	敬語
ラレ	レ	ラレ	セ	レ
ラレ	レ	ラレ	セ	ラレ
ラレル	レル	ラレル	セル	ラレル
ラレル	レル	ラレル	セル	ラレル
ラレ、	レ、	ラレ、	セレ	ラレ、
ラレ			セ	ラレ

その二に屬する活用は左の通。

願望	推量	打消
タク	ラシク	ナク
タク	ラシク	ナク
タイ	ラシイ	ナイ
タイ	ラシイ	ナイ
タケレ		ナケレ

その三に属する活用は左の通。

定指	消打	去過
デ		テ
ダ	ン	タ
	ン	タ
	ネ	タラ

注意 未來の助動詞「う」「よう」、推量の助動詞「だらう」「打消の助動詞「せい」は活用しない。

練習

一 左の文例の中から各種の助動詞を摘出して、その活用を記せ。

(1) 羣れ飛ぶ鷗落花の風に飄るに似たり。

(2) 山は霞に消えて見れども見えず。

(3) 雪にうもるゝ冬の日の悲しき夢は閉されて世は春の日とかはりけり。

(4) 氣息奄々として死期の近づけるを覺えぬ。

(5) 冷たき唇は見るゝ色を變じゆけるなりき。

(6) 有志の人の牢獄に繋がれ候ものも相助けたく候へども同社中有餘の金もあるまじき事に候へば寫本なりともして貯蓄致したく、月末銘々持寄り致すべく候。かくせば屹度他日の用に相立つべく考へられ候。

(7) 食物を興へずして、餓死せしめんとす。

(8) 諸峯は次第に低くなりて、岡のごとく、堤のごとく、はては平地のごとし。

(9) 世に天稟の才と云ふ事なきにあらねど、琢かずは玉も瓦礫に等しかるべし。

(10) 己は八裂にせらるとも、主君の過失をいはず、世にも頼しき人なるかな。

- (11) うき事のまこと聞えぬものならば、すみても見まし耳梨の山。
- (12) 先の還幸の事今や如何許り悔しくおぼし給ふらむ。
- (13) 父も珍しからぬ事なれども、よき喻にもあむつるかなと笑ひ給ひたり
- (14) 天皇の聞しめしけむ時、いかに悲しくおぼされけむ。
- (15) 義貞弓手の足を敷かれて起き上らんとせられしに、白羽の矢ありて眉間にあたる。
- (16) 明治天皇が我が國をして今日見るが如き國家的地位を贏ち得させ給へる御功績と、長くも終始御身を以て國家とせられ、ひたすら精勵國事に盡し給ひ、御生涯を通じて變らせ給ふことおはせざる御徳とは、千世萬世に輝き渡りぬべし。
- (17) 波を歩いて戻りもなるまい。

- (18) あはれ武門の御情何卒、このまゝ御見通を願ひたい。
 - (19) 大人さへ乗れないものを、御前に乗れると思ふのか。
 - (20) 武家が町人から金を恵まれて、それを唯貰つて黙つて居るとは出来ぬ。
- 二文語における助動詞と口語における助動詞との對照活用表を作れ。
- 三使役の助動詞「す」「さす」「しむ」と、敬語の助動詞「す」「さす」「しむ」とを用ゐて文例を作れ。
- 四可能の助動詞「る」「らる」と、敬語の助動詞「る」「らる」とを用ゐて文例を作れ。
- 五國語讀本から敬語の助動詞に關する文例を集めよ。

第九章 助詞

梅が枝。

都に上る。

花を見る。

花より團子。

勉強すとも及第覺束なからむ。

風吹かば波立たむ。

きたなき味方の振舞かな。

いかで早く都へ行かばや。

【六十六】 右の**が**に**を**よりとも**ば**の**か**なへ**ば**やは語句を接

助詞

續し、或はその關係を示し、又は他の語に附屬して種々の意味をあらはすもので、いづれも助詞である。

酒は、あれども、ともに語るべき友もなし。

しぐるゝ空に雁のなくなり。

山の上に家あり。

家門を過ぎて入らず。

桑田變じて海となる。

甲斐の國へ行く。

嘗て君より、貰ひ受けしことあり。

筑紫までまかる。

助詞の一

舟にて保津川を下る、

【六十七】 助詞には右の文例におけるはものにをとへより、
までにてなどのごとく、躰言に結び付いてもつばら語句の
關係をあらはすものがある。

幾度も試みしが遂に成功せざりき。

雨晴れしが風寒かりき。

雨降りて地固まる。

日暮れて道遠し。

山に入りて巖を折る。

外套なくば寒からむ。

雨降れば行かず。

いかに努力すとも甲斐なからむ。

春になりたれども風なほ寒し。

助詞の二

【六十八】 右の文例におけるがてばともどもなどのごとく

用言に結びついて、語句を接續するものもある。

ほとくと叩くは誰ぞ。

その時悔ゆとも甲斐あらむや。

不就學兒童いくばくあるか。

必ず忘れ給ふな。

老いず死なずの薬を得ばや。

人傳ならていふよしもがな。

身の丈一丈ばかりの鬼。

たゞ故郷をのみ懐ふ。

家のあたりだに今は通らじ。

毛の孔さへ見ゆるほどなり。

聖人すら猶かくのごとし。

今日しも都に着きにけり。

折ふしの移りかはりこそ物毎にあはれなれ。

はや御馬にて二條院へおはしまさなむ。

【六十九】

又右のぞやかなばやがなばかりのみだにさへす
らしこそなむなどのごとく、他の語に結び付いて疑問・感歎・

助詞の三

禁止・願望その他種々の意味をあらはしあるひはいろく
の役目をするものがある。

口語における助詞は以上のものに比較すると、その種類と用例には少
らざる相違がある。

練習

一 左の文例から助詞を摘出せよ。

- (1) 松青きところ、色どりをよるに桃の紅を以てす。自然はその美をおく
りて旅客を慰め、詩人はその美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野、山
北の谷、人毎に唯うつくしと呼ぶ。
- (2) 凡そ四明の勝は江城二州に跨り、超然として群山を抜き、東の方琵琶の
大湖と、西の方京攝の平野とを一眸に集め得べき所に在り。水を見れ

ば琵琶湖の胸腹は堅田・唐崎に至り、狭まりて轉手となり、更に瀬田・石山の邊より瀬田川となりて、一たび連山の間に隠れ、潛み流るゝこと幾里にして、更に遙かなる後方の山麓より宇治川となりて流れゆく。

二國語讀本から語句を接續する助詞を集めよ

第十章 品詞の種類

品詞

【七十七】 名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞を品詞といふ。

【七十二】 品詞には動詞・形容詞および助動詞のやうに活用するものと、名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞および助詞のや

うに活用しないものとある。

【七十二】 名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞はそれぞれ固有の意味を有して居るが、助動詞と助詞は他の語に附屬して種々の意味をあらはし、いろくな役目をするものである。

練習

左の文例から各品詞を摘出せよ。

(1) 蟻は孜孜汲々餌を漁りて寧日なし。其の奮闘努力は實に勤勉の模範たり。又夏期に働きて冬營の爲に貯蓄するが如き、其の先見遠慮は貯

蓄心の模範たり。これ蟻の美德にして詩歌に詠ぜられ文章に誣はれ、此の點において人の師たるの價値ありとさへ稱揚せらる。然れども其の勤勉は何の爲の勤勉なるか。其の貯蓄は何の爲の貯蓄なるか。要するに唯自己の爲に外ならず。

(2) 賊軍再び勢をつくして金崎を攻む。義貞拒ぎ戦へども勝たず。太子は虜にせられ給ひ、義顯は自殺しぬ。義貞走りて柚山に據る。高經をた來り攻む。義貞義助と共に之を撃ち追ひて越前府に入る。高經起りて足羽を保ち黒丸城に據る。官軍の勢大に振ふ。義貞一舉して高經を滅さんとす。

大正日本文法 修正版 上卷 終

大正七年三月一日訂正再版印刷
 大正七年七月二十日修正印刷
 大正八年七月二十五日修正印刷
 大正八年十一月十四日修正印刷
 大正八年十一月十七日修正發行

大正日本文法修正版

定價 上卷金貳拾六錢
 下卷金參拾參錢
 大正三年度 上卷金四拾四錢
 臨時定價 下卷金五拾六錢

大正十三年度 金四拾七錢
 改正定價

著者

保科孝一

保科孝一

發行所

東京市牛込區白銀町廿九番地

合資會社 育英書院

著作權所有

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

目録 甚七

佐久間衡治

合資會社 育英書院 印刷

株式會社 秀英舍

發行所 發賣所

東京市牛込區白銀町廿九番地
 振替口座(東京)七四二番
 東京市京橋區南傳馬町二丁目
 振替口座(東京)二八〇九番

合資會社 育英書院 目録 黑書店

